

## アジア系アメリカ人の教育と『タイガー・マザー』

井口 博充

### アジア系アメリカ人の増加と教育的成功

2011年にエイミー・チュアの『タイガー・マザー (Battle Hymn of the Tiger Mother)』が出版されて話題のベストセラーとなった。その背景は、アジア系の「スマート・キッズ」(賢い子どもたち)がアメリカ社会において学業面で成功を収めつつあるという共通認識があり、「一体彼らは家庭でどのように教育されているのだろうか」という疑問が広く共有されていたからだろうと考えられる。この小論では、この本の背景となったアジア系アメリカ人の社会進出の状況を簡単に解説した後、この本の内容とそれに対する反応を紹介し、最後に近年の教育研究との関連で考察してみたい。

まず、最初にいくつかの事実をあげておきたい。まず移民の増加のトレンドとして、ヒスパニック系の移民がこのところかなり急激に減少しているのに対して、アジア系の移民が着実に増加を続けて、遂に2010年の統計では、アジア系の移民がヒスパニック系の移民を遂に上回るに至った。米国国勢調査局のデータによると2010年は、ヒスパニック系の移民が移民全体の31%、37万人あまりだったのに対して、アジア系は36%、43万人あまりがアメリカ合衆国に移民したという<sup>(1)</sup>。

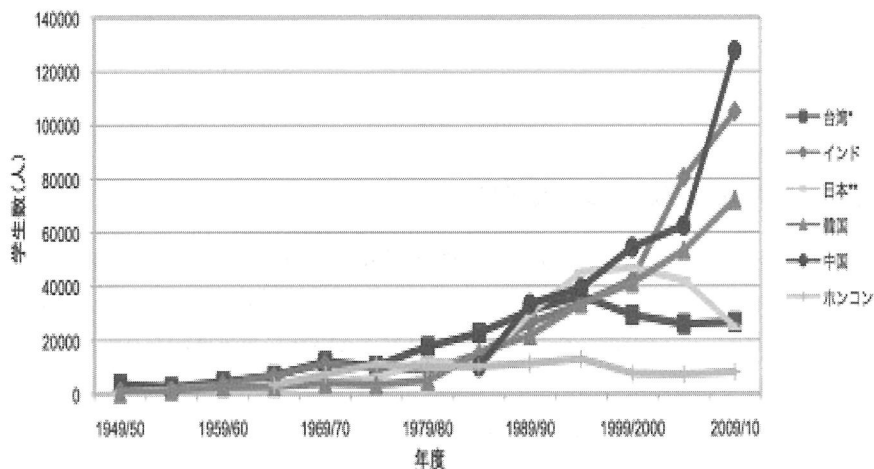
しかもアジア系の移民は、高学歴である者が多い。近年の移民の学歴を見ると、アジア系は、少なくとも一つは学士号をもっていると答えた者は、65%で移民の中でどの人種・民族よりも多かった<sup>(2)</sup>。どのようにして移民したのかという調査はないが、留学生の統計を見ると中国からの留学生は1990年代以降急速に増加して、近年では10万人を超えている(図1)。彼らの中には、アメリカで職を得て、定住を望む者も少なくない。

さらに、アジア系移民の子どもたちも高い学歴を獲得することに成功している。教育省の人種・民族別の教育達成の統計を見てみると、学士号取得、修士号取得、プロフェッショナル(例えば、医師や法律家)になるための最初の学業資格の取得という項目で、いずれも白人をかなり上回っている(表1)。この統計は移民に関するものではないが、アジア系は、1980年以降増加した移民なので、その移民者の子どもがこの統計には多く含まれていると推測できる。

このような高学歴を反映して、アジア系の家庭の年間平均所得は、米国の平均よりも1万6千ドル、ヒスパニック系ではない白人よりも1万2千ドル程多くなっている<sup>(3)</sup>。このように、統計を見る限りでは、アジア系は教育で成果を収めることを通じてエンジニアや医師などの(特に理工系、技術系で)専門職について、経済的にも恵まれた生活を送る者が増えてきているという一面がある。

図 1

### アジア諸国からの留学生の増減



(データは、Institute of International Education (ISS), *Open Doors: Report on International Education Exchange 1948-2008* (CD-Rom) 及び2009/2010年度については、ISSのウェブサイト <http://www.iie.org/Research-and-Publications/Open-Doors/Data/International-Students/All-Places-of-Origin/2009-11> より取得した。

表 1 人種・民族別教育地位達成

人種・民族	アソシエイト (短大卒)	学士号 (4年制大学卒)	修士号	専門職(医師や弁護士) になるための学問的資格	加算%
アジア系/太平洋島民	6.9%	31.6%	14.0%	6.4%	58.9%
白人	9.3%	21.1%	8.4%	3.1%	41.9%
黒人	8.9%	13.6%	4.9%	1.3%	28.7%
アメリカ・インディアン/ アラスカ先住民	8.4%	9.8%	3.6%	1.4%	23.2%
ヒスパニック系	6.1%	9.4%	2.9%	1.0%	19.4%

(Source: United States Department of Education - 2008)

### 『タイガー・マザー』の内容

エイミー・チュアは、アメリカ生まれの2世であるが、彼女は代々学者の家系で、1930年台に福建省からフィリピンに移り住み、彼女の父親は1960年に留学生としてアメリカに移民して来た。どこの国のパスポートを持っていたのかは、書かれていないが、おそらくフィリピンであろう。しかし、彼の人種・民族的アイデンティティは、明らかに中国人である。娘のエイミー・チュアのアイデンティティは、中国系アメリカ人である。

『タイガー・マザー』が話題になったのは、何と言っても、その子どもにも自由を与えずに勉強を強制する、学力(競争)中心の子育て観であろう。それを彼女が、「中国の母親」と「西洋の親」という二項対立にフレームしたところが、反発と大きな議論を呼んだと考えられる(もちろん、チュア自身は、人種・民族的に中国人だから「中国人の母親」になれると考えているわけで

もないし、人種・民族的に中国人でも「西洋の親」は少なからずいると考えている)。これは、理想形として、子どもに自由選択を与えない学力中心か、ある程度学力を犠牲にしても子どもに自由選択を与えその自律性を重視する子育てかという問題である。チュアの著作がセンセーショナルなところは、彼女がまず本の最初の章で、子どもにさせなかったことの項目をリストアップしているところである。彼女が、自分の2人の子どもに決してさせなかったのは、以下の9項目だという。

- ・友だちと外泊させない
- ・子供同士を機会を作って遊ばせない
- ・学芸会には出させない
- ・学芸会に出なかったことに文句を言わせない
- ・テレビを見させない、コンピュータゲームをやらせない
- ・課外活動を選ばせない
- ・Aより悪い成績をとらせない
- ・体育と演劇以外の科目は1番以外を取らせない
- ・ピアノかバイオリンを弾かないことを許さない

一方、「中国人の母親」の方も(1)常に学業を優先させる、(2)Aマイナスは悪い評価である、(3)子どもは、クラスの他の子どもに比べて数学では2年先を行かなければならない、(4)人前では子どもを褒めてはいけない、(5)子どもが先生やコーチと意見が合わない場合には、いつも先生やコーチの側に立つべきである、(6)子どもに参加させてもいい活動は、子どもがそのうちにメダルが取れるようなものだけにすべきだ、(7)その場合メダルは金でなければならないという学業、達成中心の非常に達成することが難しい条件が課せられている。

おそらく、多くのアメリカ人の読者は、本の始めに明快な形で書かれている上記のような厳しいスパルタ教育の部分にショックを受けただろうと考えられる。しかし、この本を最後まで読むと、子どもの意見も受け入れて、自主性を尊重するようになったチュアの姿も書かれている。そういう意味では、よく読めば単純なスパルタ教育礼賛論ではない。

### 『タイガー・マザー』に対する反応

しかし、多くの読者の目が、スパルタ教育の側面に向いたことも確かである。そういう意味で、アメリカ的な（個人の選択を重視する）自由主義的教育観を持つ人々からは批判的に見られた。この『タイガー・マザー』が引き起こした論争を最も簡潔な形でまとめたものの一つが、2011年1月13日付のニューヨーク・タイムズ紙の意見ページの「論争の部屋」で「極端な子育ては有効か」という題で行われた紙上討論である。

そこでは、8人の識者（そのうち7人が女性で、さらにそのうち3人が中国系であった）がこの論題に対して意見を表明した。以下に8人のうちの主な意見を紹介する。中国生まれの政治学者のヤン・スン、ニューヨーク市立大学の教授、このような子育てに、利点がないわけではないが、創造性、個性、指導力を育てるという点では不十分だとしている。小説家のカレン・

カルボは、子どもを囲い込むことには反対で、子どもが幸せだと感じていてくれるのが一番だと主張している。UCLAの社会科学副学部長で、香港から来たシンディ・ファンは、アジア系がアメリカ社会で認められるためには、成功することが必要だとしながらも、成功だけでなく、親切、共感、寛容などの価値を学ぶのも重要だとしている。心理学の一般向け雑誌サイコロジー・トゥデイの編集長のハラ・エストロフ・ムラーノは、親が価値や規範を決め権威を持つことを評価しつつも、親が関わり過ぎることは、独立で自律的で、社会に貢献できるような大人を育てるという点では問題だと主張している。中国系で、疑問を感じて有名な弁護士事務所を止めたジェニファー・チャンは、子どもが親の好みや目的によく考えることなしに合わせるしてしまうこと、また前提としている「成功」の定義がとても狭く捉えられていることがこのような極端な子育ての問題点だとしている。心理学者で、セラピストのデヴィッド・アンデレグは、このような子育てには、問題が多いとしつつもチュアが信念をもっていただけを評価している。しかし、親の多くは、子どもに成功もして欲しいが、それ以上に好かれる子どもになって欲しいとも望んでいるので、子どもが友だちと遊ぶことを妨げたりしないと述べている。

中国系の親世代に属するスンとファンは、チュアのような子育てを認めた上で、そのやり方で足りないところについて議論をしているが、チャンは、育てられた子どもの立場からかなり激しい批判をしている。非中国系の論者たちは、チュアの信念は認めているものの子どもは子どもの自由を尊重して、自律的な社会的存在として育てられるべきだという視点で、チュアの子育て観とは基本的に異なっている（チュアの論では、このような「西洋の親」の子育て方法は、一族の凋落につながるとしている。）

しかし、チュアの主張するような親主導の「極端な子育て」は、非中国系の人々の間でも現在の自由主義的子育てがうまく行っていない、子どもの学問的成功に結びついていないと感じている人々からは一定の支持を得たといえるだろう。しかし、チュアの子育て観は、成功しないことへの恐れに支えられているようにも見える。チュアは、アジア系だから差別された経験についてはあまり書いていない。しかし、ファンが言うように「アジア系がアメリカ社会で認められるためには、成功することが必要だ」という圧力は無視できないのではないだろうか。

## 近年のアジア系アメリカ人に関する教育研究の文脈で考える

近年、アジア系移民の家庭における教育観という関心からなされた研究で注目される研究の一つが、中国系の教育社会学者ヴィヴィアン・ローウィの『優越することを強制されて (Compelled to Excel)』(2004)である。この研究では、68人の中国系アメリカ人の大学生のインタビューを分析して、どのように民族文化と階級(社会構造)が彼らの家族と学校体験において相互作用していたか、そしてその相互作用が、彼らの移民の親たちから伝えられた教育観にどのような影響を与えたのかを考察している。この研究の対象となったのは、アイヴィー・リーグのエリート大学であるコロンビア大学と、地域に住む学生を主に受け入れている公立のニューヨーク市立大学システムの主要校の一つハンター・カレッジの2校の学生であった。コロンビア大学の学生の大多数は、近隣の主に白人が住んでいる郊外の中産階級家庭から来ていたが、ハ

ンター・カレッジの学生は、民族集住地域（チャイナタウン）の労働者階級家庭から来ていた。ローウィは、社会的に主流派の郊外と都市の集住地域という二つの大きく異なった環境で育った中国系アメリカ人がどのように生育し、中国人あるいはアジア人として、どのように人種差別を経験したのかを記述している。さらに、ローウィはこれらの学生がそれぞれの大学に進む上で、家族が果たした役割、そして家族の期待との関連で、（キャリアの選択、結婚、宗教、政治的活動など）行っている活動と将来の計画をどのように認識しているかを検討した。

インタビューの中で、学生はアメリカに移住した中国人家族が共通に持っている、教育に対する動機づけと達成について価値システム（例えば、学校で一生懸命勉強するという倫理感、家族は子どもたちが学校で成功するよう厳しく強いる）についてたびたび語った。ローウィは、これを「文化的台本」と呼ぶ。この台本は、彼らが、アメリカという固有の社会歴史的、人種的文脈をもつ国に移住することによって、変形・形成されたが、逆にこの台本によって中国系アメリカ人というアイデンティティが構築されているといえる。この研究からは、コロンビア大学の学生の進路が真っ直ぐだったのに対して、経済的な困難のある多くのハンター・カレッジの学生は、学業の中断、中退、他の学校への転校を経験している。ハンター・カレッジに通っているほとんどの学生は、この大学に来たこと自体が、家族の期待に答えられなかったという、学業の失敗を表していると感じている。同時に、彼らは自分の家族から十分な支援を受けられなかったことは、文化的規範の例外だと説明していた。そうすることによって、ローウィは、学生たちは依然として中国人、あるいはアジア系アメリカ人の家族は彼らの子どもたちの教育的成功を期待し、そのために強いるという台本を支持していると論じている。

ところで、チュアの子育て論は、「べきだ」という理想論だといえるが、家族に経済的、時間的余裕があることが必要条件であろう。そういう意味で、チュアの子育ては、上記のローウィの研究が指摘した「文化的台本」を具現化したもので、主流派の郊外に住む中産階級に当てはまる子育てであると言える。

チュアのような教育観は、ある程度その原型が伝統的な中国社会の中にあるということがいえるかもしれない。しかし、アメリカに移住した家族の場合、それに加えて、学業的に成功することによって人種差別を乗り越えなければならない（エンジニア、医師、弁護士、学者など専門職の比較的人種差別に合わないような職種が選べる）という圧力、さらに模範的マイノリティとしてのステレオタイプに合わせなければならないという圧力によって支えられていると言えるだろう<sup>(4)</sup>。確かに、このような教育観に従っているアジア系アメリカ人は相対的には（統計の上では）、教育達成の上である程度「成功」を取めていると言えるかもしれない。しかし、アジア系移民は高学歴な家庭に育った者ばかりでなく、難民としてアメリカに渡って来た者や民族系企業に安価な労働者として雇われた社会的経済的に恵まれない家庭出身の者など多様な存在であり、「文化的台本」に合わない・合わせられない者たちの挫折感は小さくないと推測される。

#### 注

(1) Pew Research Center (2013) p.20参照。

- (2) Pew Research Center 同上書 p.26参照。
- (3) Pew Research Center 同上書 p.29参照。
- (4) 模範的マイノリティとしてのアジア人というステレオタイプについては、ボブ・スズキ (1977)、ステイシー・リー (1996) 筆者の別稿、井口 (2013) などを参照。

#### 引用文献

- Chua, A. (2011). *The battle hymn of the tiger mother*. New York: Penguin Books. [邦訳エイミー・チュア、齋藤孝訳『タイガー・マザー』(朝日出版社)]
- 井口博充 (2013). 『『タイガーマム』とアジア系アメリカ人の教育達成研究』『アジア太平洋研究』No.38, 成蹊大学アジア太平洋研究センター.
- Lee, S. J. (1996). *Unraveling the “model minority” stereotype: Listening to Asian American youth*. New York: Teachers College Press.
- Louie, V. S. (2004). *Compelled to excel: Immigration, education, and opportunity among Chinese Americans*. Stanford: Stanford University Press.
- The Opinion Pages: Room for Debate “Is Extreme Parenting Effective.” (2011, January 13). *The New York Times on the Web*. Retrieved January 4, 2014, from <http://www.nytimes.com/roomfordebate/2011/01/13/is-extreme-parenting-effective>
- Pew Research Center (2013). *The Rise of Asian American, Updated Edition*. Washington DC: Pew Research Center.
- Suzuki, B. H. (1977). Education and the socialization of Asian Americans: A revisionist analysis of the “model minority” thesis. *Amerasia Journal*, 4, 23-51.